
ゴミ箱

煉獄

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ゴミ箱

【コード】

N2512D

【作者名】

煉獄

【あらすじ】

ゴミ箱を壊してしまった主人公。露店で売られていたゴミ箱を購入したのだが…

(前書き)

最初に言っておきます

途中で飽きた為、後半のほうはかなり手を抜いたのでがっかりする
かもしれません。

それでも良いと言う方はどうぞご覧ください。

「由紀、何してんの？」
「きゃっ!？」

背後から声をかけられて、私はバランスを崩してしまった。

バキツ、ドスン

「痛たたた……。もう、急に声かけないでよね」

お気に入りのジーンズのお尻に引っ付いてしまった埃を払い落とすと、私は振り向いた。

そこには目を丸くしたお母さんの姿があった。

「大丈夫？ 怪我してない？」

「私は大丈夫だけど……。あーあ」

さつき妙な音がしたと思ってたけど、私が踏み台代わりにしていたプラスチック製の古いゴミ箱は哀れにも大きく欠けてしまっていた。……。もう使えないわね。

「戸棚の上からアルバムを取ろうとしてたの。そこに落ちてる

ヤツ」

「ふーん、急にどしたの？ アルバムなんて」

「最近できた友達と丁度そんな話になってさ、お互い見せ合おうって」

お母さんはふうん大して興味もなさ気にそう言つとアルバムを拾い上げて埃を払った。

「しっかし、どうしたもんかね。もう私のゴミ箱これしかなかったの」

「あなたが踏み台に使うからよ。適当に買ってきなさい」
母さんが呆れたようにそう言った。

「はあい。んじゃ、私はみっちゃんと遊んでくるから」

「はいはい、あんまり遅くならないようにね」

お気に入りのバッグを引っつかんだ私は、その声を背に家を飛び

「あ、危ないですから気をつけてくださいよ？ ……で、何やってるんですか？」

おじいさんは大きなあくびをすると、ブルーシート上の物を指差した。

「見りや分かるだろうよ、お店だ、お・み・せ！」
「かつかつかと快活に笑うおじいさん。」

「……あなたが寝てちゃ、店の物取られちゃっても仕方ないわよ？
「しかも、近頃はやつとる全品百円の百円均一だ！」
「えええつ！？」

お、おじいさん。どう見ても百円じゃ買えないものが大半を占めてるんですが。

「噂じゃ百円ショップとやらは儲かるらしいからのお！」

「い、いや、原価以下で売っちゃどう頑張っても儲からないよ！？」

この掛け軸とか、木彫りの熊とか、この模造刀とか……。

「なぬつ！？ そ、それは盲点じゃったな、ふおつふおつふお！」

「はあ……危ない所でしたよ。……あ、このゴミ箱かわいい」

ふと見ると、ちっちゃな小鳥が装飾された真つ黒なゴミ箱があった。

「おお、お目が高いねお譲ちゃん。その漆塗りの屑籠が気に入ったのかい？ どうだね」

う、漆っ！？ 絶対高いじゃんそれ！

「え、遠慮します。そんなにお金持ってないんで」

「なあに、いい事を教えてもらったお礼だ、百円で売って差し上げよう」

「え、ホント？ じゃあ、買います！」

私が嬉々として百円玉を差し出すと、おじいさんはにっこりと笑った。

「そら、持っていきな。大事にしてくれよ」

「うん、ありがとうおじいちゃん！」

私はそのゴミ箱を抱えると、軽い足取りで帰路を辿り始めた。

「……さて、もう遅いし帰るとするかな」
由紀の背中が見えなくなったところで、老人はそう呟いた。
「厄介払いもできた……くっくっく」
不気味に笑った老人は品物を袋に収納すると、夜の闇に溶けたかのように消えた。

く
く
く
く
く
く
く
く

「ただいまお母さん。……今日の夕飯にするの？」
家に帰った私はいつも通りの挨拶を済ませると、キッチンへと向かった。

「お帰りなさい。今日はグラタンにしたわ、後で手伝って頂戴」
「えー？ 今から見たいドラマがあるのに……」

しかも最終回だから絶対に見逃すわけにはいかないし！

「ビデオ撮つときなさい……あら、これまた渋いゴミ箱買ってきたのね。高いんじゃない？」

「へへ、いいでしょ。おじいさんの百円均一だったんだよ？」

お母さんは布巾で手を拭くと、そのゴミ箱を持ち上げて眺めた。

「まあ、漆器じゃない。いい買い物したわねえ」

「うん、ラッキーだったの。じゃ、ちょっと待ってて。ビデオ準備したら手伝うから」

「はいはい、早くしてね」

私は居間へ行くと、録画の設定してキッチンへと戻り、夕飯の支度を手伝った。

ゴミ箱

「あー、ビデオとったの忘れてた……」

お風呂上がり、ほっこりした頭でそんなことを考えたけど既に時刻は十二時半。

ちよつと長風呂しすぎたかな？

「まあいいや、明日見よう」と

自分の部屋に戻ると、部屋の中央で今日買ってきたばかりの黒いゴミ箱がちょこんと座っている。小鳥の模様に一瞬顔を綻ばせると、私は電気を消してベッドに潜り込んだ。

あのゴミ箱を買ってから、一週間が経った。

しかし、あのゴミ箱はどうもおかしいみたいだった。入れた筈のゴミがいつの間にかなくなっているのだ。始めはお母さんが勝手に捨ててるんだと思ってたけど、どうも違うらしい。

「じゃあ何でゴミ箱の中身が消えるんだろ……」

首を捻ってみても、何も答えは出なかった。……ま、いつか。捨てる手間も省けるし。

……今思えばそれを放って置いたのが、間違いだったのかもかもしれない。

ついに、事件は起きた

「何よ……これ」

部屋に入っただけ、異変に気がついた。

私の部屋にあった物が、すべて消えていた。

例のゴミ箱ただひとつを除いて。

薄暗い部屋の真ん中で、ぽつんとたたずむ漆黒の筒。

かわいいと思っていた、小鳥の彫りですら、不気味に見えて仕方がない。

「……もしかして」

私が近づき中を覗き込むと、そこには何もなく底知れない“闇”が渦巻いていた。

恐る恐る、中へ手を突き出す……と。

「ッ!?!」

何かに、腕をつかまれる感触があった。

私はなす術もなく、ゴミ箱の中に潜む“闇”へと引きずり込まれていた。

(後書き)

駄作でしたが、もったいないので載せてしまいました。
ごめんなさい。

ゴミ箱

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2512d/>

ゴミ箱

2009年3月24日09時45分発行